

## 「無宗教」のホトケ様

辺見悠

父が死ぬことになった。まったく突然の話だ。二一世紀になったばかりの、二〇〇一年七月。

ベトナム旅行から戻り、その足で青森に学会の講演に出かけて帰ってくるなり倒れ込んだ。

病院に担ぎ込まれて検査を受けると、肝臓癌の既に末期。治癒する見込みは一〇〇%無かった。七〇代半ば。長生きとは言えなかったが、度外れの大酒呑みにしては、まあそこそこの寿命だったような気がする。当時の男性の平均寿命は、確か七八才くらいだった。

開業医だった。京都市内の私鉄沿線に、六〇年代から診療所を構えていた。診療科目は、「外科・内科・小児科・皮膚科・レントゲン科」と看板に記されていた。つまり、産婦人科や耳鼻咽喉科、眼科といった特に専門性の強い診療科目以外はほぼ何でも引き受けていた。言ってみれば、医療の「よろず屋」だった。昔はその近辺に医者が少なかったので、そうならざるをえなかったのだろうと思う。五〇年代に結婚して、開業したときには既に長男である私と弟がいた。ありがちなパターンで、息子たちのアタマは医学部進学に向くようにはできていなかった。父が死んだら、診療所は閉鎖されることに決まっていた。

自分の死期が近いことを知った父が最初に行ったことは、同じ私鉄沿線の大阪側に住む、小学校校長あがりの妹、つまり私の叔母さんを枕元に呼びつけることであった。兵庫県北部の寒村出身の父は、郷里の寺や坊主が大嫌いだだった。格式が高く、やたらに威張った坊主どもが、村人の足元をみて大変な額の戒名料や葬儀料を要求することは有名だった。郷里を出たとはいえ長男であり、本来ならば当然、その田舎の墓に入るべきところであった。

「ここに二十万円ある。この金で、私と郷里の墓の関係を絶って来て欲しい」と

父は叔母さんに頼んだ。「仁和寺の横にある墓所に、墓地が買ってある。私が死んだらそこに入れて欲しい。それから、葬式も無宗教でやるように」と託けた。

父らしい、と言えば父らしいやり方だった。典型的な学校秀才で、近代合理主義の権化の観があった父には、宗教的情操が全的に欠如していた。近所に住むクリスチャンの未亡人を指して、「アーメンでは金にはならんだろう」などと首を捻っていた。息子である私たちが、正月に神社でお神籤を引くことさえ不思議そうな顔で見っていた。「あんなもんよう引くねえ。良いことが書いてあっても何の保証もないし、悪いことが書かれていたら腹が立つだけだし」と。そればかりか、母方の親戚筋にあたる天理教の宗教家が家に遊びに来たときなど、一緒に酒を呑みながら、「男やったら、変なお祈りなんかしていないで、ちゃんとビジネスでもしたらどうだ」などと失礼極まることをのたまうのであった。その宗教家が激昂して、二度と父とは口も聞かない関係になったことは言うまでもない。

こう書くと如何にもひどい人間のようにだが、父は医者としては実に良心的な人間だった。「儲け主義」とは程遠い診療で、遅い時間に叩き起されても、愚痴ひとつこぼさずに往診に出かけた。他の医者が二の足を踏む、朝鮮部落と呼ばれた韓国・朝鮮系の人々の居住区にも分け隔てなく往診に出かけた。おかげで息子の私たちも、患者さんたちから貰う本場もののキムチやホルモン焼の味に、小学生時代から慣れ親しんできた。

私が入院中の父の枕元を訪れたのは、七月の二二日頃であった。病院に行くのと、医師から話があると告げられた。「もってあと一ヶ月。早ければあと一週間の命です」と。死んだのは、医師の予想した期間のほぼ中央値。八月八日の暑い昼下がりであった。

それから、私たちのコメデイみたいな、死の儀式をめぐるドタバタ劇が始まった。私たち家族にとって、初めて送る死者だった。葬式のノウハウなど何も知らない私と母と弟が、一切を仕切らねばならなかった。一応葬儀社は手配してあり、死のセレモニーに関わる殆どのは、葬儀社のマニュアルに従って進行して行く手筈になっていた。仏教各宗派はもとより、キリスト教式、神式など様々な宗派ごとの対応もそのマニュアルには書かれていたはずだ。勿論今の世の中、無宗教で葬儀を行う人は決して少なくはない。葬儀社のマニュアルにも、「無宗教」で行う際の説明も一通り書かれていたことは言うまでもない。

しかし、宗派ごとの葬儀のセレモニーと、「無宗教」という枠組みで行う葬儀の方法には決定的な相違があった。無宗教の方が、遺族が選ぶ裁量の余地が遥かに大きいのだ。というよりも、元々は何の枠組みもないところに、無理やりそれらしい形式を眺めただけという方が当たっている。私たち家族三人は早速混乱状態に陥った。

先ず、葬式を「献花」にするか「焼香」を行うかということで、父の遺体の周りを囲んでいた人々が論争を始めた。叔母をはじめ、何人かの親族が「献花」を主張したが、父と深い付き合いのあった友人家族などが「焼香」をしなければ落ち着かないと言い始めた。暫く議論が続いたが、最後は喪主である母の裁量に委ねられ、「焼香」を行うことになった。後日、東京に戻った私が、職場の同僚の女性にこのエピソードを話すと笑われた。「焼香って仏さんに対して行うものでしょ、無宗教で焼香って、一体誰に対して行う訳？」

彼女の言う通りだったが、その時点では私自身も判断力を喪失していた。肝臓癌だった父は、短い期間ではあったが、相当の痛みに見舞われていた。モルヒネで痛みを誤魔化しながら、父は自分の葬式や死後の段取りをノートに書きとどめていた。葬儀委員長を誰にするか。葬式に呼ぶ人や、更には四十九日の法要に招待するメンバーのリストまでこと細かく書き残していた。四十九日の法要は、京都の某ホテルで行うように指示していた。待てよ、何かおかしい。大体四十九日って何だ？ 無宗教じゃなかったのか？ だがまあ、そのようなことを考えて、死ぬ前の辛さを誤魔化しながら痛みに耐えていたのだろう。「葬式仏教」と呼ぶように、多くの日本人の「仏教」は甚だ思想性が薄い。そういう意味ではいい加減なものである。家で死者が出て、初めて仏さまを拜むようになり、仏壇との付き合いが始まる。キリスト教徒やイスラム教徒のような、確固たる「信」がない風土では、「無宗教」もまた、決然とした合理主義的精神に基づくものというよりは、漠然とした成り行きまかせのものになるしかない。

とにかく私たちは、斎場でシヨパンのレクイエムを流し、近隣の大病院の病院長や医科大学の学長などの弔辞を頂き、なんとか「通夜」と「葬式」を済ませた。家を継がずに東京でヤクザな生活をしている、ドラ息子の子が肩身の狭い思いをしたことは言うまでもない。父が四十九日の場として指定していたホテルでは、精進料理を供する料亭が相当先まで予約が詰まっております、私の判断で同じホテル内の中

華料理屋で法要を行った。「いやはや、こういう風に言っただけは悪いかもしれないですが、実に愉快的な四十九日でした」と葬儀委員長を務めてくれたお医者さんは私に握手を求めてきた。餃子を食べる四十九日。これは無宗教らしくていい。しかし、その同じ日の昼間には、予想もしていなかったセレモニーが墓場で展開されたのだった。

墓地は仁和寺に隣接する、寺経営の霊園だった。随分前から父はその墓所を買っていたみたいだった。「このままでは、お父様をお墓に入れる訳にはいきまへん」と霊園を仕切る中年女性が私に告げた。「今のままだと、墓石は墓石ではなく、ただの『石』です。うちは宗派は問いません。しかし、お坊さんに『墓開き』をしてもらって、はじめてお墓ができるんです」と。仕方がない。父を墓に入れない訳にも行かない。結局、仁和寺に属する真言宗御室派のお坊さんに「墓開き」をしてもらい、その後で死者を弔うお経を読んで貰って、はじめて父の遺灰は墓に入ることが許された。私たち遺族と親族は、秋雨の降りしきるなか、カラフルな傘を差して線香をお墓に捧げた。父の郷里の寺に「縁切り」に赴いた私の叔母が、ひときわ納得の行かない表情を浮かべて無然と佇んでいた。

結局、私たち家族は、仏壇を買い位牌を作ることにした。そうしないことには、どうも心の収まりが着かなかったのだ。仏壇屋には、私と母とで出かけた。強い風雨が吹き付ける悪天候の日だった。私は母の座った車椅子を片手で押しながら、もう一方の手で傘を差して進んだ。ヒューヒューと音を立てて吹き付ける風のせいで、傘の骨が歪んだ。踏み切りで電車が通り過ぎるのを待ちながら、この日のことは忘れないだろうと思った。

戒名のない位牌だった。でも私たちは、仏壇に供えた位牌と大日如来を前にして、妙に安らかな気持ちになった。死者を巡るセレモニーが、結局はすべて生きている人間のためのものであることがよく分かった。

夢を見た。仏教式であの世に送られた父が、丸い目をキョロキョロさせながら正座して、仏像と自分の位牌の前で慌てて手を合わせて頭を下げているユーモラスな夢だ。「参ったな、こりゃいかんわい」とでも言うように、夢のなかの父はあたふたしていた。私たちと父は、決して友好的な親子関係ではなかった。でもどれほど憎しみを心のなかで反芻していても、仏壇の前に座って線香に火を点すときには、穏やかでしみじみとした気持ちのなかに広がった。それは最早、父個人がどう

のこうのということを超えた、宇宙が生み出した生命というシステムに対する畏敬の念に近いもののように思えた。